

Cataluña

官 田 齊

その昔英文科の学生だった頃 Thomas de Quincey の名著 Confessions of an English Opium Eater を読んだことがあります。その中にたしか次のような話が出ていました。ロンドンにイタリアの歌劇団が来て公演をした時 de Quincey も評判のオペラを楽しもうというので劇場に出かけたのだそうです。舞台での音楽も演技ももちろんすばらしかったけれども、幕間に lobby で大使館員をはじめ、当時の London 在住のイタリア人達が声高に話し合っているのを聞いているのがまた趣きがあった、と de Quincey は語っております。「自分はイタリア語がわからないので彼等の話の内容に煩わされずにただひたすらイタリア語の music を味わっていた。」というようなことだったと記憶しています。多少なりとも臍曲りの de Quincey のことですから負け惜しみもあったでしょうが、たしかに melody に集中できるのはこういう状況の恩恵の一つにちがいません。私が昨年 (1967) の8月半ばに Cataluña を訪れた時もこの de Quincey の場合とよく似た状態でした。

まず以てお断りしておかなければならないのは私は romaniste ではありません。では germaniste かとおっしゃられてもただちに「ハイ」ともお答えしかねます。要するに平凡なそして旧式の英語教師であるにすぎません。ただ日常の用を弁ずる仏語を使い、看板がある程度読める Castellano を解する点で強いて言えばまあ amateur の雑学者であります。もちろん、そうはいても格別首をちぢめて恐縮しているわけでもありません。amateurこそ amour を以て学ぶのだから暮しのために学問をする職業的の学者よりも上等だと見得をきった Schopenhauer のようなもので(少くとも自分では)こう申している次第です。

扱て8月中旬、私は家内を連れまして Paris から Tours にまいり、駅前のハタゴに一泊して Amboise と Chenonceaux の美しい夜景で巧妙に演出された Son et Lumière という Show を心ゆくまで楽しんでから、Vierzon を経て Toulouse に行き駅ホテルに宿をとりました。Compagnie de Midi 経営の station hotel で駅舎の中にある官庁のような体裁の堂々たる宿でしたが、この帳場で対応に出た中年の女性の /R/ の発音があきらかに Paris のいわゆる R grasseyé とちがう apical で捲舌のひびきをもっていたことから、langue d'oc の圏内に来たのだという印象を強く受けたことを思い出します。但し Toulouse には一夜の宿りをとっただけで、このことと、おせい夕食をたべた食堂のチーズ入りスープがチューインガムを煮たような珍しい代物であったこと以外に何ひとつ見聞することもなく、翌日(8月14日)は再び列車に乗って南へ下って行きました。

私は Paris の中心部はかなりよく知っておりますが、南 France ははじめてのことなので Toulouse を発車して間もなく車窓に Cite de Carcassonne の偉容を垣間見た時は、「しまった」と舌打ちした次第です。Schopenhauer を真似てみてもこの辺が amateur の浅はかと申しますか、修復を加えたとはいえ中世の城市を眼のあたり見せているこの monument のあることを知らなかったのです。幻はあっという間に消え去ってしまいました。ただ幸いなことにギッシリつまった二等車のデッキに立っていた私たちのそばにいた若い女性(Toulouse の高校の英語の先生)がその後この cite のス

ライドを一組さがして遙々おくって来てくれましたのでそれを眺めていささか自ら慰めております。

8月15日の公休を利用して地中海のあちこちに海水浴に行く人たちと Narbonne で別れ、いよいよスペイン行の汽車に乗りかえました。一方に新鋭車を誇る SNCF もこの線では昔なつかしい機関車が煙を吐き、左手に紺青の地中海を、遙か右には Pyrénées Orientales の峻々を望む間を悠々と行くのもまことに興味深いものがあります。私共夫婦が大した目方でもないカバンを引き摺るように運んで行くのを気の毒がって車内の人たちがいろいろと面倒を見てくれました。中でも Barcelona の近傍に住んでいて、始終商用で国境を越えるという屈強な工員風の人が巧みなフランス語で、「あの廢墟はローマ人の遺跡、あちらの白い丘はこのあたりの塩田でできた塩の山…」などといちいち説明してくれたのにはたすかりました。どこの海岸にもあるトンネルを出ると入江があり、また一つ抜けると入江がある、という風景の中を進んで Port-Bou からいよいよ Cataluña 入りです。身分証明書一枚で自由に往来が出来る西、仏の人たちは暑中休暇の帰省や日帰りの海水浴客で、長旅の荷物をかかえた外国人は見わたすところ私たち二人だけ、周囲はフランス語、カタラン語が入り乱れ次第に de Quincey の状況になってきます。賑やかで騒々しい話し声、途中の小駅でしばらく停車したまま動き出さなかった時など、けんかかと思うような掛合が始まったこともあります。これとて争いでもなんでもないむしろ親密な田舎人の遠慮のない話し声だと聞かされました。

Barcelona の駅に着くと、まず駅前通りの車の混雑と歩道に山と積った紙屑には恐れ入りました。昔の上野駅を思い出すような光景でこれは空港から空港へと渡り歩く tourist 諸君にはちょっとわからないことかと思えます。これに引きかえ駅の案内所で世話してくれた宿のある Calle Pelayo のはずれにある Universidad は宮殿のような品格を備え由緒ある古都の学府たる威容を見せていました。世界のどこの都もここ Barcelona と同じくいろいろの様相を呈していて、そのどれかだけを垣間見て帰って来て一言を弄するのは慎しむべきだと改めて考え直した次第でした。

はじめてスペインに入るというのに東北隅に近い Barcelona とその西北約70キロの Manresa にだけ行って来たのはいささか private な理由がありました。その第一はこの Manresa に住む Maria Carmen Trulls という若い娘さんが1962年最初の訪欧の時以来の忘年の友であり、その一家の客として招かれたこと、第二はロマンス語研究会のお手伝いを私なりにするためにいささか Catalan の文献を集めて来ることです。Trulls 一家は総出で私共を歓待してくれ、英、独、仏を自由に繰る Carmen 嬢(23才)とその妹の案内で Pueblo Español (スペイン村)と名付けるスペイン各地の建築物や名産を一ヶ所に集めた遊園地をはじめあちこちを案内してもらい、豪華壮麗な monasterio が繁栄を誇っている Montserrat 山(1,236m)の奇岩に打ち興じ、町の食堂に入って「ヤキ飯」を注文するつもりで rizo と言ってしまい後から米は arroz で rizo は curl だと教えられて頭を掻いたり、いろいろありますが、すべて省きまして Catalan が活潑に話されていること、Cataluña の人々は標準語の Castellano をもちろん知ってはいますが、Catalanこそ自分たちのことばだという誇りをもっていること、世界の古典をはじめ現代のものまでいろいろの書物が Catalan に訳されて出版されていること、を報告するとどめませんが、古本屋で手に入れた Hamlet の Catalan 訳からあの To be or not to be の条りを、抜き書きしてご参考に供することにい

たします。

Viure, o no viure: la qüestió és aqueixa:
si pensa amb més noblesa que suporta
dardsi fonades d'ultratjant fortuna,
o aquell que s'arma contra un mar de penes
i amb les armes s'hi oposa per finir-les.
Morir, dormir: res més. I dir que acaben
amb un son les tristors i els mil encontres
dels quals la carn és natural hereva,
és una fi que desitjar deuriem
devotament. Morir, dormir. Dormir!.....
qui sap si somiar!..... Vet aquí el tràngol,

(Traducció de M. Morera I Golícia)

(早稲田大学教授)